

ベトナム戦争の記憶：戦場の女性と詩

白井洋子

... It's about sunlight. It's about the special way that dawn spreads out on a river when you know you must cross the river and march into the mountains and do things you are afraid to do.

Tim O'Brien, "How to Tell a True War Story."

1. はじめに

1991年、アメリカがベトナムでの戦争に敗北を喫してから16年後に、一冊の詩集、*Visions of War, Dreams of Peace: Writings of Women in the Vietnam War* が出版された。これは、タイトルにも示されているように、ベトナム戦争体験をもつアメリカの女性の作品を集めた詩集で、女性自身の手で編集されている。二人の編者の前書きには次のようにある。「戦争と女性についての神話があるとすれば、それは1979年のことだったが、ニューヨークにある出版社の編集者のことばがはっきりとももの語っていた。『女性が戦争について言える事なんてあるのかね。しかもベトナム戦争についてだって?』」¹ 1979年と言えばベトナムでの敗北から4年後、かの女たちの詩集が出版される12年前のことである。この編集者の発言は出版を相談されたときの卒直な反応だったのであろう。そしてこのような意識が、当時の、戦争と女性についての世間一般の受け止め方だったと言える。

この詩集出版の意図を編者たちは次のように説明する。男たちは帰還後、自らの戦争/戦場体験を叙情豊かに、かつ重々しさを漂わせて、詩や散文、フィクション、ノンフィクションとして発表した。それらを基にした映画

や演劇も作られた。戦争がどんなものか、知っているのは俺たちなんだ、と。同じくベトナム戦場から戻った女性たちはどうだったかと言えば、やらねばならぬ日常の仕事に明け暮れ、結果的に書くことは男たちに任せるままにしてきた。たとえ戦争について書いたものが出版されたとしても、本屋ではせいぜい伝記ものか手記本の棚に並べられるのがいいところで、戦争関連書に分類されることなどなかった。ましてや戦争や戦場について女性が書いた詩集など皆無に近かった。*Visions of War, Dreams of Peace* の出版は、ベトナム戦場での体験、帰還後の葛藤を折々に書き綴ってはみたものの、日の目を見ることなく引き出しの奥やノートの間にしまわれていた詩に光を当てようとの試みなのである。²

Visions of War, Dreams of Peace には 123 篇の詩が収められている。執筆者は 38 名 (内 6 名はベトナム人女性)。アメリカ人女性のベトナム戦争中の所属先内訳は、陸軍看護部隊 23 名、海軍看護部隊 1 名、空軍看護部隊 1 名、第二次大戦時の陸軍看護部隊 1 名、赤十字 3 名、フレンズ奉仕委員会 1 名、反戦活動家 1 名、民間人団体 1 名。なかには個人の詩集を出している詩人や著作をもつ女性も含まれるが、ほとんどの執筆者がこれまでに詩集など出版したことのない人たちである。その多くが看護部隊所属の看護兵であり、時には男性兵士が戦場で見るよりも多くの死者や負傷者と向き合ってきた。ベトナム戦争期には 2 万人近くのアメリカ人女性がベトナムに派遣されたが、そのうちの 1 万 1500 人ほどが軍人女性で、その 80 パーセントが陸海空軍の女性看護兵だった。男の戦闘員の戦場体験とは異なる視点から戦争の現実を捉えたことばは、かの女たちの「内なる戦場」から発せられた声でもあった。

2. アメリカ人女性の戦争参加

戦争や戦場は男の世界であるという言説に反して、女たちがさまざまに戦争を支え、ともに戦ったことも事実である。ここでアメリカ人女性の戦争への関わり方について、概略しておく。

アメリカの歴史は戦争の歴史でもあった。植民地時代のはじめから、先住民とヨーロッパからの植民者との戦争をどちらの側の女性たちも避けて通ることはできなかった。植民者側について言うならば、独立戦争、1812年戦争、南北戦争時には、男装した女性の兵士や海兵隊員が実在したことはよく知られている。また独立戦争には数多くのキャンプ・フォロワーズと呼ばれた非戦闘員の女性たちが、軍隊と行動を共にした。かの女たちの多くは兵士の妻で、看護や料理、洗濯などの仕事で日々の食べ物や手間賃を稼いでいた。なかには前線で兵士の夫の戦闘補助をした者もいた。南北戦争には、クリミア戦争でのナイトインゲールの活躍の影響から、北軍南軍ともに戦場での専門的な訓練を受けた女性たちによる看護態勢が組織的に導入された。北軍側には多くの黒人女性が負傷兵の看護活動に携わった。米西戦争になると、男性衛生兵からなる陸軍医療部隊が編成されたのと並行して、1882年に設立されたアメリカ赤十字から派遣された契約看護婦が従軍した。つまり近代史における医療、看護の歴史は戦争と軍隊の歴史と切っても切り離せない関係にあったと言える。

軍隊内に女性の看護部隊が編成されたのは20世紀に入ってからのことであるが、それはあくまでも補助部隊としての位置づけであり、軍隊内の地位も階級もなく、従って復員軍人としての特典も認められなかった。第一次世界大戦では、最大時2万3000人の陸海軍看護部隊の女性と1万人の赤十字からの看護婦が戦地に派遣された。第二次大戦になると女性の軍隊参加は大幅に増大する。1942年に結成された陸軍補助部隊(WAAC)が翌43年には陸軍女性部隊(WAC)となり、これに陸軍5万7000人、海軍1万2000人の看護部隊の女性を併せ、総勢35万人の女性が軍隊を介して戦争に関わった。しかし看護部隊を含めた軍所属の女性たちがベテラン(退役/復員軍人)に与えられる諸特典の有資格者となるには1948年に制定された女性軍役法を待たねばならなかった。³

1967年に公法90-130が撤廃されると、それまで軍隊内の女性比率を抑えていた2パーセント条項も廃止され、同時に軍の女性の職種と昇進の機

会も大幅に拡大された。1973年には反戦運動の高揚により選抜徴兵制が廃止され、その年から全軍が徴兵制から志願制に移行すると、軍隊に占める女性比率は急増していく。1978年にWACは解散となり、女性兵士の大半を擁していた陸軍は男女統合の軍隊へと生まれ変わった。カーター政権下で1980年に男性対象の徴兵登録法が復活すると、男女平等主義を標榜するリベラル・フェミニストの最大組織である全米女性組織(NOW)は、女性にも兵役義務を課すべきであると主張した。しかし1982年に平等権修正条項(ERA)が必要な38州の批准を得られずに不成立に終わったことで、兵役義務についての男女平等が法的に保証されるまでには至らなかった。レーガン政権の時代に入ると「強いアメリカ」復活に向け保守的な愛国心が煽られ、グレナダ侵攻(1983)やパナマ侵攻(1989)には直接的な戦闘行為ではないにせよ多くの女性兵士が軍事作戦に参加している。湾岸戦争(1991)では女性の戦闘機操縦士も出現するなど、戦場における女性兵士の活動は顕在化し、軍務にも実戦的要素が強められるようになった。その後のアメリカの戦争と軍隊への女性の関わりについては、ここであらためて述べる必要もない。

ベトナム戦争後も、アメリカは世界の各地で戦争を続けてきた。しかし、戦争の意味を問う、戦争の真実に迫る、戦争の悲哀、苦痛を言語化する作業は、ベトナム戦争以後も、他の戦争によってではなく、やはりベトナム戦争を振り返ることで続けられている。これだけ戦争についての詩や、小説や、さらには映画、絵画を創らせてきた戦争とは、ベトナム戦争において他にはない。そしてまたベトナム戦争ほど、戦争に、戦場に直接関わった女性たちに詩を書かせた戦争はない。書かれた詩の数の多さについては、男性兵士の場合にも同じことが言える。それは何故か。何故、ベトナム戦争は文学のテーマでありつづけるのか。本稿は、その問いへの接近の一步である。

3. 女性の戦争体験が世に出されるまで

Visions of War, Dreams of Peace は、女性たちの「ベトナム」体験を表現した最初の詩集であるが、これ以前にもすでに女性ジャーナリストによる戦争体験がノンフィクションの形で出版されている。次の3冊はその代表的なものである。Francis FitzGerald, *Fire in the Lake: The Vietnamese and the Americans in Vietnam* (Boston: Atlantic Monthly, 1972); Gloria Emerson, *Winners and Losers: Battles, Retreats, Gains, Losses, and Ruins from a Long War* (New York: Random House, 1976); Myra MacPherson, *Long Time Passing: Vietnam and the Haunted Generation* (New York: Doubleday, 1984). フィッツジェラルドは、フランス支配に抵抗したベトナム人の戦いの教訓からアメリカの戦争が無益であることを論じ、エマソンは、帰還兵、妻たち、抵抗した若者たちへのインタビューをもとに、アメリカ人たちがこの戦争の意味を問い続けている様を描き、マクファーソンは、この戦争がアメリカ社会にもたらした陰の部分の浮き彫りにしている。

しかしながら、女性の「ベトナム」体験をはじめて赤裸々に語ったのは、*Visions of War, Dreams of Peace* の編者の一人で元陸軍看護部隊所属のヴァン＝デヴァンターだった。その著、*Home before Morning: The True Story of an Army Nurse in Vietnam* (New York: Warner Books, 1983) には、看護兵としての戦場体験、かの女たちが帰国してから味わった疎外感、PTSD (心的外傷後ストレス障害) の苦しみ、同時期のアメリカ国内のフェミニストたちへの違和感、ベテラン (退役軍人) 女性としての権利主張のたたかいが率直に描かれている。ヴァン＝デヴァンターの著作が引き金となり、帰還後に PTSD 症状に苦しんでいた陸軍や海軍の看護兵や赤十字から派遣された看護婦たちも口を開き始めた。1980年代後半から1990年代にかけて、女性の「ベトナム」体験がオーラル・ヒストリーの形で次々に出版された。⁴ さらに、*Home before Morning* のように、個人の体験を一冊の書物の形にまとめたものとしては、Winnie Smith, *American Daughter Gone to War: On the Front Lines with an Army Nurse in Vietnam* (New York: Pocket Books, 1992)

がある。

宗教組織や民間の慈善団体から自発的にベトナムに渡った女性たちも、軍から派遣された女性とは異なる戦争体験を著している。レイディ・ボートンはその代表的人物である。かの女は、1969年から71年まで南ベトナムのクアングイにあるフレンズ（クエーカー）奉仕委員会のリハビリテーション・センターで、爆撃により手足を失ったベトナム民間人のための義手義足製作の技術指導や難民救済活動に従事した。数多くの詩を書き、アメリカの新聞や雑誌への寄稿を続け、*Sensing the Enemy: An American Woman among the Boat People of Vietnam* (1984); *After Sorrow: An American among the Vietnamese* (1995) の著者としてもよく知られている。⁵

Visions of War, Dreams of Peace 以前に出版されたベトナム帰還兵士による詩集は、ほとんどが男性兵士の作品を収めたもので、戦中から戦後早くに刊行されたものとして次の3冊がある。Larry Rottmann, Jan Barry, and Basil T. Paquet, eds., *Winning Hearts and Minds: War Poems by Vietnam Veterans* (1st Casualty Press / McGraw Hill, 1972); Jan Barry and W. D. Ehrhart, eds., *Demilitarized Zones: Veterans after Vietnam* (East River Anthology, 1976); W. D. Ehrhart, ed., *Carrying the Darkness: The Poetry of the Vietnam War* (Lubbock, TX: Texas Tech University Press, 1985). そのなかには幾つか女性の作品も含まれるが、ベトナム戦場体験をもつ女性のものとなると、わずか一篇だという。元海兵隊員のW. D. エアハートは、数多くの詩集に加え、自伝的小説やエッセイ集を発表しているが、*Visions of War, Dreams of Peace* に出会ったときには、「ベトナム」体験をもとに書かれた女性の詩がこれほど多くあったことへの感動を率直に表している。しかもその女性たちの大半が女性ベテランだった事実を知ったことへの驚きには、複雑な思いも込められていた。「私の書いた詩を女性ベテランたちがどのような気持ちで読んでいたかを想像すると、とてもいたたまれない思いに何度も襲われた。」⁶ その詩、“The Relative Thing” (1972) の最後連を引用する。

We are your sons, America,
and you cannot change that.
When you awake,
we will still be here.⁷

Ehrhart は、合衆国政府と軍隊が戦場にどれだけの女性がいたのか正確に把握していなかったことを厳しく批判すると同時に、男性兵士自身もかの女たちの存在とかの女たちが戦場や軍隊で受けていた苦痛に対してあまりにも無知であったことを恥じている。実際、ベトナムから帰還した軍人女性たちは、男性帰還兵たちからもベテランとはみなされず、帰還後はベテランとしての権利を獲得するための新たなたたかいを始めなければならなかった。

1980年代半ばを過ぎると、ボストンにあるマサチューセッツ大学ウィリアム・ジョイナー・センターでアメリカ側のみならずベトナムの詩人や作家を交えた戦争文学を共通テーマとする文化交流が始まり、その成果として、Kevin Bowen and Bruce Weigl, eds., *Writing between the Lines: An Anthology on War and Its Social Consequences* (University of Massachusetts Press, 1997) が刊行された。ここには(全314頁)計49名の作品(詩、小説、ノンフィクション等107篇)のうち、アメリカ人女性9名の17篇、ベトナム人女性2名の2篇が収められている。戦争終結から20余年後、ベトナムとアメリカの双方の詩人たちが、女も男も、それぞれの立場からの戦争体験を共有することで、この戦争の真実に迫ろうとした。因みに両国の国交が正常化したのは1995年のことであり、国交正常化を可能とした背景には、このような文学者、研究者、元兵士、反戦活動家ら民間人の多様な、それこそ息の長い民際的な努力が積み重ねられていたのである。

4. 戦場の記憶：「本当の戦争の話」⁸

元海兵隊員だったアレン・ネルソンは「死のにおい」について彼の戦争体験のなかで語っている。そのにおいは蒸し暑いジャングルに散らばった

死体のおぞましい光景に繋がっている。自分についての死臭は洗い流すこともできないのではないかとさえ思われた。⁹「におい」は文字にも映像にも表現されないが、戦場の記憶として強烈に残される。ベトナムでは看護部隊の女性たちは戦闘看護兵 (combat nurse) とも呼ばれ、当時を振り返ったときに真っ先に思い出されるのが、この「におい」だと言う。¹⁰ 陸軍看護部隊のジョン・P・スキーバも緊急手術室でこの「におい」と格闘した一人だった。次に引用するのは、かの女の“In Memorium” (1987) の書き出しである。(以下、詩の最後の数字は、*Visions of War, Dreams of Peace* からの引用頁である。)

The ER was so busy with the wounded — so damn young —
the cries and smells were background, the “push”
had just begun
The back room called “Expectant,” where those not
yet gone would pass — where the hope for saving
had been lost, and they would breathe their last. (65)

「死のにおい」は皮膚や肉の焼け焦げたにおいととも、看護兵の記憶に絶えずつきまどってきた。“Expectant”とは、生への望みではなく、すぐそこまで来ている死を意味した。そして運び込まれた負傷兵のうち助かる見込みのない者を治療対象から外すかどうかの判断は通常女性の看護兵に任されていた。この辛く重い優先順位づけ (トリアージ) の作業には人間的感情を抑え込むことが求められたが、そのことが後に女性看護兵の PTSD 誘発の要因ともなっていたのである。

海軍看護兵だったマリリン・マクマホンを詩の世界に導いたのも、ダナンでの戦争体験だった。“Knowing” (1988) には、同僚たちが精神的身体的に障害をもつ子どもを出産し、流産した数多くの症例に接し、自らもダイオキシンの汚染されていることを知る作者の、子をもつことをあきらめるといふ悲しい選択が綴られている。

I knew part of the price / when nine other women

who had watched the helicopters / and seen the mist
 talked of their children: / Jason's heart defect, and
 Amy's and Rachel's and Timothy's
 How lucky they felt / when one child was born healthy / whole.
 How they grieved / about the miscarriages
 one, two, three, even seven
 I choose not to know / if my eggs are / misshapen and withered
 as the trees along the river.
 If snipers are hidden / in the coils of my DNA. (187-189)

同じ作者による“Wounds of War” (1988) は、看護兵や戦闘員が戦場の記憶と結びついた PTSD と苦闘する姿を伝えている。傷の深さは、この戦争の無意味さと、非道な、底知れない残虐性を示すものでもある。傷の痛みに呻いているのは自分たちだけではない、ベトナムの人びともまた苦しんでいるのだという視点もこの詩には込められている。

Wounds heal from the bottom up / and from outside in
Each must be kept open, / must be proved / and exposed to light.
Must be inspected / and known. (87) (斜体は原文通り)

ロンビンの後送病院にいた陸軍看護部隊のキャスリーン・トルウの“Mamasan” (1970)¹¹ は、日常生活における年配女性の仕草から向こう側の世界を垣間見たものである。

Mamasan / Squats at her basin / Wringing out endless chatter
 Through blackened teeth that hide here smile
 Orange clouds of dust / Chase black silk Pajamas
 That scurry in the breeze / To cover bowed legs.
 She filters out of our world
 Back to hers / Through a simple gate. (23)

ベトナムの人びとへの眼差しは、軍人ではない、民間人女性の書いた作品の中により率直に表現されている。クアンガイで民間人負傷者への医療支援を行っていたフレンズ奉仕委員会のレイディ・ボートンによる“Vo Thi

Truong” (1972) は、水田で銃撃され重傷を負った母を看病する 3 歳の少女との交流を詠んだものである。

My day starts when I see Truong.
She lives in the hospital's paraplegic ward
where her mother suffers from the results of a bullet
that damaged her spinal cord / while she was planting rice.
She will live another month, / perhaps.

ボートンは少女を保育所に送り出すために、毎朝母親のいる病棟の前で待ち合わせることになっているのだが、少女はそこにいたためしがない。

I look around the ward. / And almost invariably I find her
peeping out from where she sleeps,
in the spilled urine under her mother's bed. (21)

毎夜、病院の湿っぽい母の寝台の下で眠る少女が、朝になるともぞもぞと這い出してきて、はにかみ笑いとともに走り寄り、かの女の足下に絡みついてくるのを確かめるところから、ボートンの一日は始まる。戦争が生み出した現実がこの母子の姿を通して伝わってくる。

この詩集にあるベトナム人の英訳された作品 6 篇のうち、フォン・トラムの “The Vietnamese Mother” (1976) は、ベトナムの側から敵のアメリカ兵の母を思い遣ったものである。

One night in late 1965 / A Vietnamese mother received a letter
From her beloved child / In the battle field
Telling her of his first memories of war.
He'd seen a young American soldier / Agonizing
As he let out his last sigh.
“Oh Mama!” the American had cried.
Tears filled the Vietnamese mother's eyes

7 年後、このベトナムの母は息子の死をその友人の手紙で知らされる。息子は “Oh Mama!” と叫んで息を引き取った、と。

Again and again she cries / For her lost son
 And for an unknown American mother
 Who lost her beloved child. (41)

ベトナム側からのこのような作品がこの詩集に収められていることの意味は大きい。これも語り継いでいきたい「本当の戦争の話」の一つである。

編者の一人、ヴァン＝デヴァンターの“TV Wars First Blood Part II” (1990) には「ベトナム」の教訓を風化させまいとするかの女の毅然とした姿勢がそのまま表現されている。ベトナムでの敗北から 10 年も経たないうちにアメリカは中米に兵を送り、さらに中東で「ベトナム」を繰り返そうとしていた。

Beside the ship leaving port / For the hot, dry gulf
 The white-haired woman says
 I'm proud of my grandson / He has to go
 To protect our interest.
 Dear lady,
 Your interest just left on that ship. (190)

本稿では *Visions of War, Dreams of Peace* 所収の作品のごく一部、それもそれぞれの作品の抜粋を紹介したにすぎない。作品のほとんどが 1970 年代から 1980 年代に書かれたものであり、ベトナム戦場で女性も戦っていたことについての認識が男性兵士の間でも薄かった時代に、書き溜められてきた作品である。体験した戦争は同じでも、戦場での任務や持ち場、戦争への関わり方の違いから、異なる視点による戦争体験が伝えられることで、戦場は男の世界という従来の捉え方がいかに一面的であるかを、これらの作品は示している。また、この戦争の全体像へと読者を一歩近づけてもくれている。

5. おわりに

戦争は文学の主要なテーマとなってきた。しかし *On Native Grounds* (1942,

邦訳『現代アメリカ文学史』1964)の著者アルフレッド・ケイジンは次のように言う。「戦争文学が偉大であった時代は、1920年代のヘミングウェイとその世代の作家たちで終結した。……第二次世界大戦の文学は本質的には芸術的であるよりも、むしろ記録的なものだ。」「ヘミングウェイは文学的想像力をかきたてる《男らしさ》をためす素晴らしい試練として、また文学的想像力をかきたてる刺激として、常に戦争を愛してやまなかった。」そしてベトナム戦争については「文学として認めうるものが……完全に別種の主題に思える」と述べている。¹² 1983年の札幌クールセミナーでの基調講演からの引用であるが、それからすでに30年近く経過している今日読み返してみると、「別種の主題」という表現は実に示唆的である。

ベトナム戦争についての文学作品は、そのほとんどが実際にベトナムで戦ったものによって書かれている。そのことは戦中から戦後にかけて、脈々と書き綴られてきた詩の作者がベトナムからの帰還兵であることから明らかである。そして詩の書き手には戦場での様々な体験をもつ女性も含まれていた。兵士の多くが平均19歳の徴兵された若者たちだったこと、女性看護兵の平均年齢も23.6歳だったという事実も、この戦争の特徴である。ケイジンの言う「偉大な戦争文学」とは異質の、「完全に別種の主題に思える」作品群は、そのほとんどが戦争の実際の担い手たち、さらにはこの戦争の最大の問題点、つまりはかれらにとって意味の見出せない戦争であった点に根ざしていた。ここで取りあげた女性によるごく限られた数の作品からもわかるように、この戦争から生まれた詩は、体験者たちの戦場での日々と、戦場の記憶に引きずられた帰還後の生活の断面である。しかしその断面を切り取る感性が鋭ければ鋭いほど、戦争の本質は深いところから暴き出されるのであり、戦争の全体像を指し示してくれるのである。まさに「個人的なことは政治的である」というこの時代の産んだことば通りである。そしてアメリカ人の痛苦の向こうにはベトナムの人びとの慟哭があることへの追想へと、ポートンの詩“Row upon Endless Row”(1984)は読者を静かに導いてくれる。

It was the summer of 1971
 Driving from Washington to Boston / I lost my way.
 The July heat was heavy
 Then, / on both sides of the highway, / as far as I could see,
 stretched a graveyard. / Stone after gray stone
 The tombstones went on and on / like rows of parading soldiers

降り出した雨が激しくなり、ニュースを聴くためにカー・ラジオのスイッチを入れると、そこではアメリカ兵の屍体勘定リストが読み上げられていた。その何万倍何十万倍ものベトナム人死者には目もくれずに。

The road and the water grayed / until panic washed over me.
 I pulled off onto the shoulder of the road / and wept. (53–54)

兵士であれ、民間人であれ、泥沼化した戦場を体験したアメリカ人の目にはいつしか、ベトナムの兵士と民衆も、家族の安否を気遣い、人の死を悼む、自分たちと同じ人間として映っていた。それはフォン・トラムの作品“Vietnamese Mother”に見られるアメリカ兵の死とその母の悲しみを想うベトナム人の心にも共通するものである。おそらくケイジンの指摘した「別種の主題」とは、戦場体験者の作品に込められたこのような眼差しにつながるものではないだろうか。そしてアメリカ兵にとってのこの戦争の無意味さこそが、このような視点を書き手に与えたのだと言えよう。

注

1 Lynda Van Devanter and Joan A. Furey, eds., *Visions of War, Dreams of Peace: Writings of Women in the Vietnam War* (New York: Warner Books, 1991).

2 Ibid., xxii.

3 アメリカの軍隊と女性、看護部隊の歴史については、以下を参照されたい。Jeanne Holm, *Women in the Military: An Unfinished Revolution* ([1982], Presidio Press, 1993); Judith Hicks Stiehm, ed., *It's Our Military, Too: Women and the U.S. Military* (Philadelphia: Temple University Press, 1996); アン・ハドソン・ジョーンズ編著 (中島憲子監訳) 『看護婦はどう見られてきたか—歴史、芸術、文学におけるイメージ』時空出版、1997年; 白井洋子「ベトナム戦争とジェンダー」『戦争と女性: アメリカ史における戦争と女性に関する多文化主義的社会史的研究』科学研究費研究成果報告書、1998年。

4 オーラル・ヒストリーの代表的なものは以下の通りである。Keith Walker, *A Piece of My Heart: The Stories of Twenty-Six American Women Who Served in Vietnam* (New York: Ballantine Books, 1985); Kathryn Marshall, *In the Combat Zone: An Oral History of American Women in Vietnam* (Boston: Little, Brown and Company, 1987); Elizabeth M. Norman, *Women at War: The Story of Fifty Military Nurses Who Served in Vietnam* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1990); Olga Gruhzt-Hoyt, *A Time Remembered: American Women in the Vietnam War* (Novato, CA: Presidio, 1999).

5 Lady Borton, *Sensing the Enemy: An American Woman among the Boat People of Vietnam* (New York: The Dial Press, 1984); *After Sorrow: An American among the Vietnamese* (New York: Penguin Books, 1995).

6 W. D. Ehrhart, “Foreward,” Van Devanter and Furey, eds., *Visions of War and Dreams of Peace*, xvii.

7 —, ed., *Carrying the Darkness: The Poetry of the Vietnam War* (Lubbock, TX: Texas Tech University Press, 1985), 97.

8 ティム・オブライエン (村上春樹訳) 『本当の戦争の話をしよう』(文春文庫、1998) から借用した。Tim O’Brien, “How to Tell a True War Story” from Tim O’Brien *The Things They Carried* (Houghton Mifflin, 1990).

9 アレン・ネルソン 『戦場で心が壊れて——元海兵隊員の証言』新日本出版社、2006年、25–30頁。2009年3月、枯葉剤の後遺症と思われる多発生骨髄腫により死去。

10 *Vietnam Nurses*, DVD, Creative Street Media Group, 2007.

11 “Mamasan”は、米兵が沖縄滞在中に覚えた女性への呼称とされる。

12 アルフレッド・ケイジン「戦争とアメリカ社会——文学の視点から——」小川晃一/石川博美編『戦争とアメリカ社会 アメリカ研究札幌クールセミナー 第4集』木鐸社、1985年、99–123頁。